

木津川きはら〔一名泉川いづみがはといふ。河海抄かかいせう曰、泉川いづみかはといふは木津川きはらをいふなり、八雲御抄やくもみせうには、柞は、その杜もりのもとなりとぞ。又瓶みかの

原きはらの郷がう、中井平尾村ちゆうのひらをに川あり、水上わづかは和束わづかより流て、末は木津川きはらに落る、これを泉川いづみかはともいふとぞ。古来より両義決せず。木津川きはらの水源は伊州山田郡阿知いしゆうといふ所より出、伊賀半国いははんこくの水此川いに流れ、末は淀川よどがはに落る、霖雨れんうにあらず、晴天せいてんの日ひにても東風とうふうつよく吹くときは満水まんすいして堤つゝみに溢る、白砂はくさ常に流れて川の面おもては白布はくふを敷ふたる如ごとくなり〕

玉葉 月影も夏のよわたる泉河川いづみがは風涼し水のしら浪 俊成女

新千 泉河遠いづみがはきわたりの月影いづみかげに声をつくして鳴子規 後宇多院

新続古 かさねては衣手寒しいづみ川千鳥鳴夜のあかつきの霜 野宮左大臣